

- ▶褥瘡になる本当の理由を理解デキル
- ▶病期に合わせて簡単な局所療法を選択デキル
- ▶姿勢の整えが重要で、安楽がキーワードだとワカル
- ▶在宅褥瘡にはそれぞれにものごとがあり、丁寧なアプローチが必要だとワカル

1. 褥瘡の圧迫は単純ではない

褥瘡は、高齢者やがん末期で寝たきりの患者などに起こる圧迫を第一原因とする外傷である。しかし、実際の発症には「持続的な圧迫」「ずれと摩擦」「低栄養」が関与しており、症例ごとに3つの要因がどのように影響しているかを検討し、対策することが必要である。

① 持続的な圧迫が生じる理由

褥瘡が発症する皮膚とは、身体の中で一番敏感な組織である。その皮膚に穴が開く褥瘡は、発症前から激痛があるため自然に体位変換が行われ、褥瘡予防となっている。逆に言えば、褥瘡を発症する患者には、痛みが生じていても身体を動かさない理由があると考えられる。

皮膚に障害を与える持続的な圧迫を避けるために体位変換をするには、①意識がある、②痛みを感じる、③体を動かせることが必要である。

寝たきりや脊髄損傷の患者においては、意識障害・感覚障害・運動障害のいくつかがみられ、褥瘡発症の高危険群である。これらの障害の有無をしっかりと把握しておきたい。

② 圧迫による組織損傷は骨の近くから始まる

体重による圧迫がより強くかかるのは、体の下になる部位であるが、特

に骨が突出しているところにより強く圧迫がかかる。このため褥瘡は骨突出部に発症するのが特徴である(図1)。

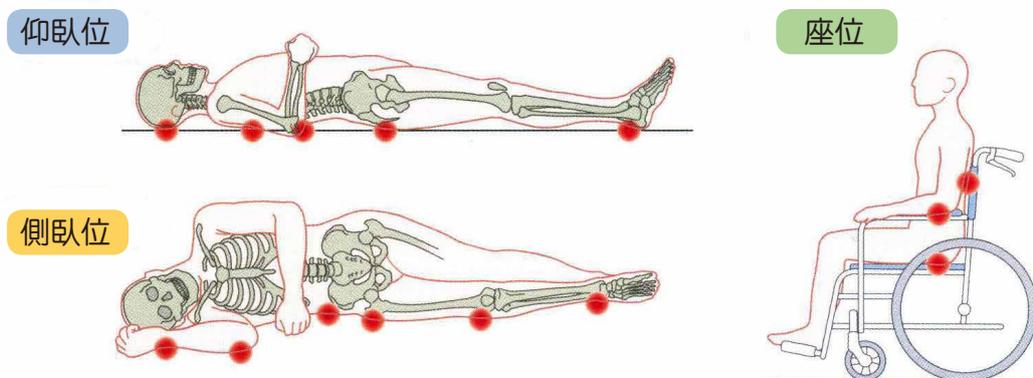


図1 褥瘡好発部位

体の下になり、骨の出っ張ったところが好発部である。

図2は、体重のかかった骨を重しに見立て、皮膚・皮下脂肪組織・筋肉組織などの軟部組織をスポンジに見立てて、ベッドなどの平らなところに寝ている状態をシュミレーションしている。当初平行に引いた格子模様が重しによってゆがんでいる。このゆがみが褥瘡発症の組織障害である。我々が見ることのできる皮膚表面よりも重しに近い深部でのゆがみが大きく、褥瘡における組織障害は一般の傷と異なり、より深部から発症することがわかる。

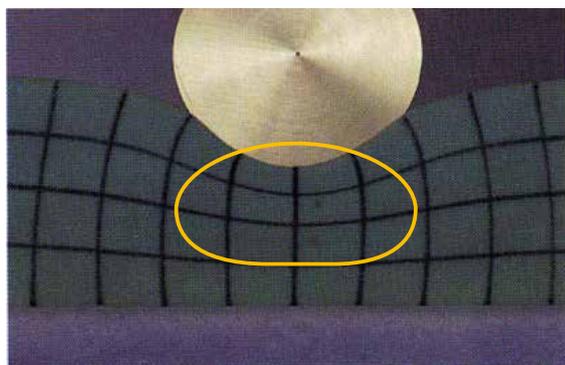


図2 褥瘡モデル

褥瘡は深部から発症する。

〔大浦武彦，他，編：TIMEの視点による褥瘡ケア—創床環境調整理論に基づくアプローチ。学研メディカル集潤社，2004，p126より転載〕

③褥瘡は見えないところで進行する

図3-1a, 1bは、同日に撮影した同患者の右大転子部と左大転子部の写真である。皮膚に発赤がみられ、早期褥瘡である。ここで高機能体圧分散寝具（エアーマットレス）を導入し、皮膚を保護する閉鎖性ドレッシング材を貼付し、栄養改善を開始した。右大転子部の2週間後が図3-2aである。皮膚の色は悪化し壊死していることが示唆される。さらに、1週間後に皮膚の壊死と診断し皮膚切除を行ったところ、図3-3aのように出血もせずミイラ化した組織を除去すると骨に達した。皮膚の下も壊死してえぐれ、ポケットを形成してした。しかし、同時期の3週間後、左大転子部（図3-2b）は、皮膚の色が改善し治癒している。

この例では、右大転子部の変化は灰白色になっている（図3-2a）。これは閉鎖性ドレッシング材（この例ではデュオアクティブ®）を用いることで、乾燥化と感染を避けられたためである。ガーゼで処置された場合は、乾燥して黒色痂皮となり、多くは痂皮の下で感染し蜂窩織炎の状態になる。

皮膚の壊死は判定しにくいですが、図3-1aはプログラム細胞死（アポトーシス）の段階と考えられる。この状態ではもはや何を行っても褥瘡は骨に至ることが約束されてしまっている。では、この左大転子部の状態から右大転子部の状態（1b→1a）になるのに、どれくらいの時間を要するのだろうか。早ければ一晩、遅くても1週間以内と考えられ、褥瘡を早期に発見した場合、直ちに褥瘡ケア（体圧分散、ずれ対策、栄養改善）を開始する必要性が強調される理由である。

また、発赤程度の早期褥瘡を発見した時に、安易に「治る」と言っはならない。この例でも最高の治療を行ったにもかかわらず、図3-1aの褥瘡は悪化し最終的に骨に至った。感染を起こさなかったことは幸いであるが、ガーゼ処置を選択した場合、ほぼ100%悪臭を伴う感染褥瘡となる。初期段階で安易に「治る」と宣言した場合、患者家族は医療者に対し強い不信感を持つ結果となる。裁判沙汰になることもうなずける。

褥瘡は見えないところで進行していることを理解して頂きたい。



図3 褥瘡発症比較

図3-1a, 3-2a, 3-3aは治療に抗して褥瘡は進行したが, 図3-1b, 3-2bは順調に回復

④ 褥瘡はみるだけではなく触るべし

早期褥瘡を発見した場合, より危険な深部組織損傷の有無を知る方法はないのだろうか。最近では超音波検査により皮下の浮腫等で判定する方法も